

## 人権教育に関する特色ある実践事例

基準の観点	学校全体として人権尊重の視点に立った学校づくりが組織的かつ効果的に進められている実践事例
-------	--

### 1. 基本情報

#### ○都道府県名及び市町村名

富山県氷見市

#### ○学校名

氷見市立西部中学校

#### ○学校のURL

<http://www.city.himi.toyama.jp/~60240/index.html>

### 2. 学校紹介

#### ○学級数

【通常の学級】全学年1学級、【合計】3学級

#### ○児童生徒数

【全児童生徒数】84人（平成26年5月1日現在）  
（内訳：1年 30人、2年 30人、3年 24人）

#### ○人権教育開発推進事業、人権教育研究推進事業実績（実施年度及び事業の別）

平成25年度人権教育研究推進事業人権教育研究指定校

#### ○学校の教育目標、人権教育に関する目標など

##### 【学校の教育目標】

「自立・友愛・実践」の精神を基本に据え、知・徳・体の調和のとれた人間性豊かな生徒を育成する。

##### 【人権教育に関する目標】

自ら学ぶ意欲をもち、互いに認め合い、高め合う生徒の育成

#### ○人権教育に係る取組一口メモ

一人一人の自尊感情を育むとともに、互いのよさや違いを認め、共に高め合うことができる生徒の育成を目指す。

#### ○人権教育にかかる取組の全体概要

生徒の連帯感や愛校心、他との関わりを通してよりよく生きようとする心と態度の育成を目指し、活動時間を十分保障した生徒会活動、上級生が下級生を指導する縦割りの活動、地域と連携したボランティア活動、地域の人材を招いた講演会や体験教室など、コンパクトな学校規模を生かし、人との関わりを大切にする教育活動に取り組んでいる。特に、生徒の主体性を高める指導に重点を置き、学習活動を中心とした学校生活の様々な場で、自分で考え、判断して取り組んでいく生徒の育成を目指している。

### 3. 特色ある実践事例の内容

#### 1 主題解明の視点

生徒の主体性を高め、学校生活の場で自分で考え、判断して取り組む生徒の育成

- (1) 「とやま型学力向上プログラム（Ⅱ期）」をそれぞれの教科に生かし、「学習意欲の向上」に向けた指導の在り方を更に工夫する。
- (2) 学習活動を中心とした学校生活全般を通して、生徒が互いに認め、励まし合う機会を充実させ、自尊感情の高揚を図る。

#### 2 実践事例

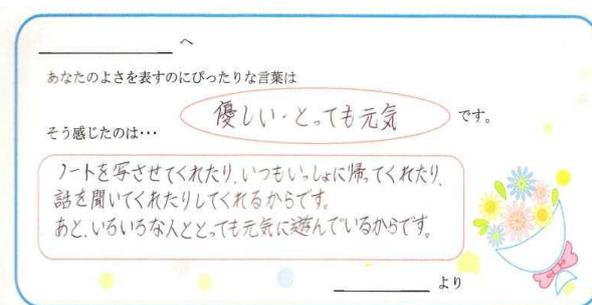
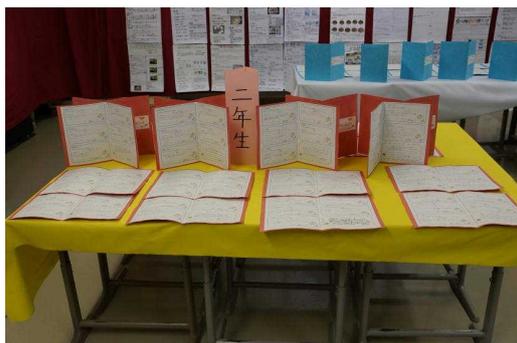
##### (1) 自分自身と他者を尊重することの大切さを学ぶ活動

###### ① 第2学年 学級活動「賞賛の気持ちを表現する」（人間関係づくり）

クラスメイトを始め他者の好ましい行動や発言に対し、賞賛の気持ちを表現する活動を通して、他者の個性を理解、尊重し、思いやりの心を育むことと自尊感情を高めることをねらいとして実施した。

事前にアイスブレーキングで実施したゲームで6人グループを作り、1週間そのグループの仲間のよいところを見つけるよう伝えておいた。本時では、「賞賛」するための言葉について考え、グループの仲間に贈る賞賛の言葉をカードに書き、交換した。

###### ② 学校祭「メッセージカード『あなたに贈る言葉』」

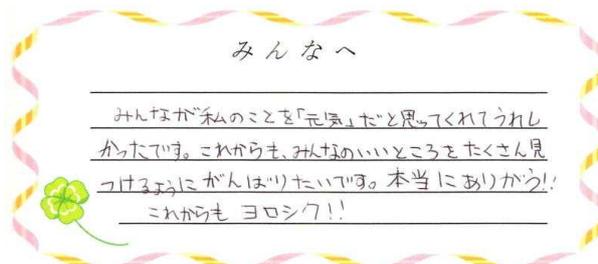


2年生で実施した上記の学級活動が大変有効であったので他学年にも広げることにした。生徒会活動の一環として、「心～一人一人の想いを繋いで～」をテーマに掲げた学校祭に向けて取り組むこと

にした。学年ごとに4～5人ずつのグループを作り、互いのよいところを見つけ、メッセージカードに書き込み、交換した。学校祭当日は生徒会展示室に全校生徒分を展示した。

##### 生徒感想（3年生）

ちょっとした言葉でも自分のよいところを書いてもらおうとうれしいと思いました。友達のよいところを言葉で表すのは難しかったですが、日ごろ、友達には言えないことを言葉で伝えられてよかったと思います。言葉の力は大きいと思いました。これからも、友達のよいところを見つけて、伝えてあげたいと思います。



## (2) 身近な人権課題を知り、人権意識を高める活動

### ① 北朝鮮による日本人拉致問題啓発アニメDVD「めぐみ」鑑賞

人権課題としての拉致問題について知ることと併せて、子を思う親の気持ちを学び、家族が互いを思いやる心情を育むことをねらいとし、2、3年生を対象に「めぐみ」鑑賞会を実施した。鑑賞会に先立って、内閣官房拉致問題対策本部事務局政策企画室の方から拉致問題の概要を説明していただいた。

「拉致」という言葉は聞いたことはあったが、具体的な内容までは知らない生徒が多かったため、驚いていた。そして、拉致被害に遭われた方やその家族の心情を思いやるとともに、「今、自分たちが幸せに生活できることの有り難さを感じた」という感想が多く聞かれた。

### ② 人権に関する講演会（講師：富山国際大学こども育成学部 彼谷 環准教授）

身近な人権課題について知ることと、人権尊重の意識をもって生活をする態度を養うことをねらいとし、人権に関する講演会を実施した。講師には、富山国際大学子ども育成学部の彼谷環准教授を招き、「私たちの暮らしと人権『自由』と『平等』について考える」と題して、全校生徒を対象に講演していただいた。

講演では、人権誕生の歴史や憲法と人権の関係、世界の子供たちの人権状況などについて話され、生徒は特に「児童労働」や「子供兵士」の問題に関心をもった。また、講演の最後に彼谷先生が語られた、「人権意識を高めるトレーニングは、その人の立場になって想像してみる」ことが印象に残ったようであった。

## (3) いじめについて考える道徳の授業（内容項目4—(3)「正義、公正・公平」）

### ① 第3学年 題材名「卒業文集最後の二行」＜中学生の道徳3、あかつき＞

#### ア ねらい

いじめの愚かさを知り、差別や偏見を憎み、不正な言動を断固として許さない道徳的態度を育成する。

#### イ 資料の内容

小学生のころのいじめた体験と後悔の念を切々と語る手記である。貧しく身なりの汚いT子をいじめ抜いた筆者は自らを悔い、その罪業を心から反省する。過去の自分の行為に苦しみ続ける筆者の心に焦点を当て、自己を正すのは自己しかないことを学ぶ。

#### ウ 授業の概要

内心悪いと分かっているながら、安易な気持ちから面白がっていじめを止められなかった筆者の気持ちを掘り下げていった。そして、卒業文集最後の2行を見て、T子さんの心の叫びに触れたことであふれ出る後悔や懺悔の念など、心の変化について考える場を設けた。その後、終末15分間で、NHK道徳ドキュメント「自分のことばで考える」を視聴した。「どんなことがいじめか」「友達がいじめをしていたら」という課題に対する他の中学校の同級生の思いを知ること、自分たちに置き換えて考えることができた。

② 第1学年 題材名「私もいじめたひとりなのに」＜中学生の道徳1、あかつき＞

ア ねらい

自己中心的な考え方から脱却して、正しいと信じることを自ら積極的に実践できるよう努めることができる。

イ 資料の内容

いじめの実体験を綴った中学生の作文。自分が標的にされることを恐れ、「菌回し」によるいじめに同調してしまう弱さをもつ一方で、いじめを憎む勇気と正義感をもち合わせる筆者の心情の変化を考える。

ウ 授業の概要

始めに、「菌回し」は駄目だと分かりつつも、自分もみんなと同じようにしてしまう心の葛藤について考える場をもった。その後、ある事件をきっかけにいじめている男の子に立ち向かっていく主人公の心の変化を考えていった。

(4) 集団の一員として、互いに認め合い、よりよい生活を築こうとする学年縦割りの活動

① 運動会での種目の工夫

本校の運動会は伝統的に、出身地区別に団編成をし、競技、応援合戦に学年の枠を超えて取り組んできたが、団ごとの人数に大きな差が出てきた。そのため、地区別の団編成は今年で最後となり、学年の枠を超えて交流できる種目を充実させ、実施することで団結力を高めようと、生徒会を中心に種目の見直しを行った。

ア 各団全員参加による「大縄跳び」

この競技では、一人ずつ順番に「8の字」を描くように大縄を跳び抜け、1分間に跳んだ回数を競い合った。縄を回す生徒と跳ぶ生徒のタイミングや速さを合わせる必要があり、どの団も練習時からよく話し合い、全員で声を掛け合って取り組んでいた。また、苦手な生徒には団の仲間が後から跳ぶタイミングを教えたり、「大丈夫。できる。」と励ましたりしたことで、その生徒も本番では跳ぶことができた。運動会本番では、どの団も練習時よりも記録を伸ばし、互いに健闘をたたえ合っていた。また、他の団の跳躍を応援したり、好記録に対して拍手を送ったりする姿も見られた。



イ 生徒会企画による「二人でサンドイッチ」

生徒会のアイデアで、互いが協力し合ってゴールにたどり着ける種目として「二人でサンドイッチ」が考案された。この競技は、二人一組で1個のボールを背中やお腹で挟んでゴールまで運ぶというものである。二人が歩調や息を合わせていかないと前へ進めないため、相手に合わせて動くことが求められる競技である。生徒は互いに様子を見合ったり、声を掛け合ったりし

て取り組んでいた。また、異学年でペアを組むチームもあり、先輩が後輩を優しくリードする姿も見られた。

② 宿泊学習での1・2年生合同の活動

5月に1・2年生が砺波青少年自然の家で宿泊学習を行った。入学間もない1年生が早く中学校生活になじみ、部活動や生徒会活動で協力して活動が進められることをねらいとし、1・2年生の男女混合のチーム編成でビーチボール大会を行った。企画と運営は2年生が中心となって進め、全員がボールに触れることができるようルールも工夫した。当日は2年生が1年生に積極的に声をかけ、1年生も2年生がリードしてくれることに感謝しながらプレーし、和やかな雰囲気を進めることができた。この活動を通して、1年生はクラス内だけでなく2年生とも交流を深め、2年生は先輩としての自覚をもつことができた。

(5) 人権教育の視点を取り入れた各教科の活動

① 英語科におけるコミュニケーション活動

英語科のコミュニケーション活動では、事前に話し方、聞き方のマナーを指導し、活動に取り組んでいる。活動後は、相手の話し方についての評価と話から分かったことや感想などを評価カードに記入して、交換している。

この活動を通して、相手の話を集中して聞くとともに、相手の話を理解しようとする意識も高まってきた。

② 数学科における「教え合う場」の設定

数学科では、問題演習の際にグループやペアで互いに教え合ったり、解き方を話し合ったりする場を設けている。生徒同士で話し合うことで、教えられた側は疑問が解決したり、新たな考え方を見付けたりすることができ、学習意欲の向上にもつながっていった。また、教える側はより理解が深まり、自分の考えに自信をもつことができた。

③ 「学びのサポーター」と連携した学習支援

本校には「学びのサポーター」が配置され、数学科、英語科、美術科で生徒の学習を支援し、一人一人に寄り添った学習活動を行っている。数学科では一人学習の際に、質問のある生徒や解き方が分からない生徒に対して、個別に指導をしている。英語科では、コミュニケーション活動の相手をしたり、英作文を書く際に助言をしたりしている。美術科では、図案作成の際に助言をしたり作業の補助をしたりしている。このことによって、生徒の学習意欲が向上してきた。

④ 音楽科における全校合唱の取組

本校では7月に行われる氷見市中学校音楽会で、2・3年生による合同合唱を、10月の学校祭では全校生徒による合唱を行っている。

どちらも3年生が中心となって選曲し、パート練習や全体練習では、各パートの譜読みや強弱の付け方を1・2年生に指導し



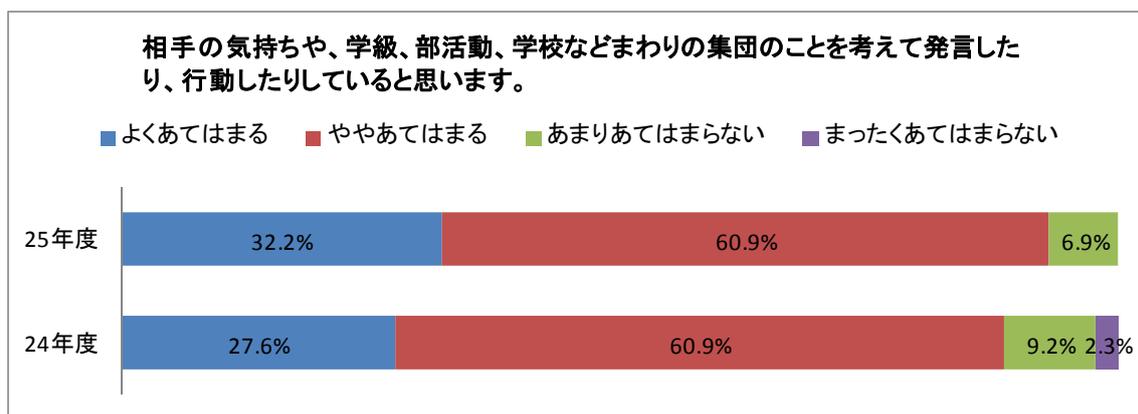
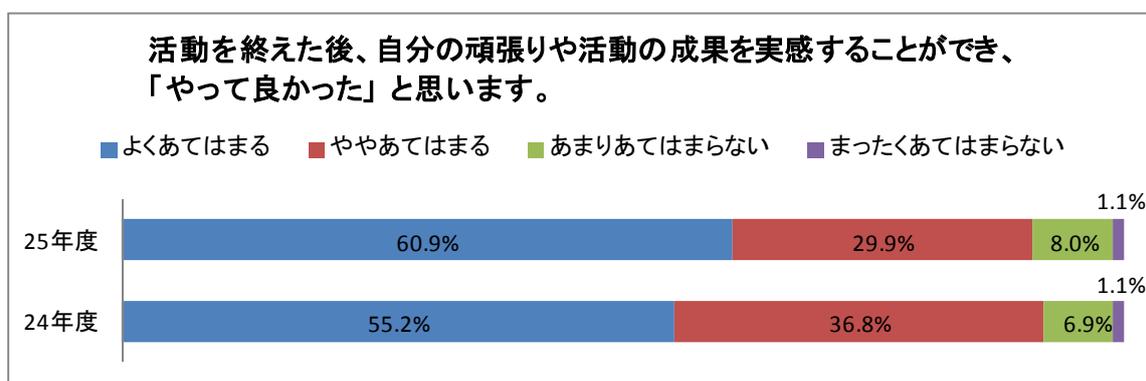
ていた。1・2年生は自分たちが3年生の歌声に近づけるよう努力していた。そして、歌い終わった後は、3年生から学んだことを最上級生になったときに生かすよう、心を新たにしていた。3年生は、自分たちの役割を果たし、一つのことをやり遂げることを通して、共に高め合うことの大切さを学ぶことができた。

#### 4. 実施する際に生じた課題及びその解決策

教師の側からは、「人権」について知識として知ってはいるものの、実生活での言葉遣いや掲示物の取扱いなどについて改めて意識することの大切さに気付いたという意見が聞かれた。特に、学校祭での「あなたに贈る言葉」や授業、学校行事等での教師からの言葉がけによって、生徒の表情が生き生きと変化したことに触れ、言葉を大切にしていこうという意識が高まった。

#### 5. 実践事例の実績、実施による効果

##### (1) 取組の評価（生徒の中間評価より）



※ 実施日 25年度：平成25年9月10日、対象：全校生徒88名  
24年度：平成24年9月11日、対象：全校生徒90名

「活動を終えた後、自分の頑張りや活動の成果を実感することができ、『やって良かった』と思います。」の項目では、「よくあてはまる」又は「ややあてはまる」と答えた割合は前年度と同様に約9割を占め、中でも「よくあてはまる」は約6割を占めている。このことから、自己有用感や自尊感情の高まりが感じられる。学校行事や生徒会活動、保護者や地域の方々との活動を終えての生徒の感想からも達成感

を読み取ることができた。また、相手の気持ちや周りの集団のことを考えて発言したり、行動したりする生徒が前年度よりも割合が増え、9割超となった。これは、「あなたに贈る言葉」の取組や、各種講演会、体験活動で招いた講師の先生方の話を聞くことで、相手の気持ちになって考えたり、見聞を広げたりすることができたからではないかと思われる。

## **6. 実践事例についての評価**

全校生徒88名の本校はクラス替えもなく、同じ学級編制で3年間を過ごすため、互いのことがよく分かっている一方で、親しさのあまりから不用意に相手を傷つける言動をとることもある。また、人間関係が固定化し、新たな人間関係を築けないこともある。自分を大切にするとともに他者を大切にすることができる人権感覚を一層涵養していかななくてはならない。

3月には3年生が卒業し、4月からは新入生を迎え、新たな顔ぶれでの中学校生活が始まる。引き続き本校の特色を生かして、上記の成果を土台とし、相手を思いやる気持ちや共感する態度を更に育て、人権を大切にすることをより高めていきたい。

## 【人権教育の指導方法等に関する調査研究会議によるコメント】

### 氷見市立西部中学校

全校生徒数 84 名の学校規模を生かし、人権教育の基礎である〈人との関わり〉を重視している。生徒の連帯感や愛校心、よりよく生きようとする心と態度の育成を目指している。生徒及び教職員・地域が一体となり、活動時間にゆとりのある生徒会活動、全校生徒の交流し合う縦割りの活動、地域と連携したボランティア活動や講演会・体験教室などの具体的実践が生徒個々の人権理解と価値・態度形成そして行動化をはぐくんでいる。

特に人権教育の普遍性を重視し、「とやま型学力向上プログラム」を具現化している。英語での話し方・聞き方のマナー指導、数学での解き方を教え合う場の設定、パートリーダー（3年生）が活躍する全校合唱などである。生徒個々の学びに寄り添う「学びのサポーター」の実践もうまく機能している。また、道徳の授業で取り組むいじめ対策や運動会・宿泊学習での異学年の学び合いなどが自己有用感や自尊感情の高揚に資している。